

無量寿經の宗教と世間の問題……信と俗……

世間と出世間

仏教では、我らの生きるべき道を、世間道と出世間道とに分ける。出世間道とは、涅槃一如の世界に向つての道であり、世間道とは、世間相對の道である。迷いを離れて悟りを開くとか、此岸を越えて彼岸に至るとか言うのは、出世間道であり、五常五倫の道を履み行うが如きは、世間道である。一は絶対門であり、一つは相對門である。しかしこの二門は根本的に二つあるのではなくて、一つのもが二つに現われたのである。しかし一つではない。絶対門は、生死を超え、善悪美醜を超えた道であり、相對門は、善悪染淨対立し、柳は緑、花は紅の世界である。この二門の交渉は、相当こみ入った問題で、ここでこの問題に入ろうとするのではない。無量寿經のみ教えが私たちに生きて来た時、いわゆる大信心を成就する。その信心と人間の生活との交渉を語ろうと思うのである。

悪人正機と道德

浄土真宗の他の宗教と違う所は特にこの「悪人正機の救い」の上にあると言われる。たしかに如来本願の世界は悪人正機の世界にある。

「善人なほもて往生を逐ぐ。いはんや悪人をや。」

「弥陀の本願には、老少善悪の人をえらばれず、たゞ信心を要とすと知るべし。その故は、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。」

こうした歎異抄の聖句は、まことに宗教の世界、救いの世界の深さを現わされたものである。まこと有難い言ことばである。深く如来本願の大慈悲、絶対救済の聖意、頂戴すべきである。

しかるに、この悪人正機の世界は、あまりにもきわどく大悲の眞実を現わされてあり、信の極致を示されてあるが為に、昔から、世間道德を乱しはしないかと、危ぶまれて来た。そして浄土真宗に対する非難もまたここに加えられて来た。

宗教とは

しかし、この非難は確かに浄土真宗の現実に当たっているのを、悲しまないではいられない。それは、信が生きることによつて、俗が乱れるはずはないのに、事実においてそうなっているが故である。そしてそれは何が故であったか。悪人正機の願意を領解せずして、自力をもつて御文をもてあそんだが故である。蓮如上人の奥書

「右斯聖教者為当流大事聖教也。於無宿善機無左右不可許之者也。」

ただに門外漢が誤解したばかりでなく、教えを説き、大法を伝える者までがこれをもつて自他を誤り、これを聞く者も得手勝手にこれをもてあそんだが故である。

悪人正機の救いということは、悪人になれと勧めることでもなく、惡のままでもいいと許すことでもなく、惡に大胆になれと言うのでもない。まことに悪人を如来の眞実によつて救いたもうのである。眞実が衆生の心中に徹到して、衆生の惡逆を救いたも

うのである。すでに、久遠の真実心を廻向したもうのである。何で危険があらう。微塵の危険すらないどころか、死せるものを生かし、不純なるものに、汚きものに清浄なる生命をそそぎ、煩惱の薪を、不滅の真実聖火によつて燃したもうのである。

宗教の「宗」とは、生命であり、大本であり、主要であり、本源であり、尊高である。したがつて宗教とは、これなくしては一切が成立たない所の「宗たる教え」である。しかして如来の本願こそは、その宗教の本質である。これが衆生に生きたもうことによつてのみ、人間の生活は真実となるのである。何で、いかなる悪人をも捨てまゝとする大悲の真実本願が、人生において危険であらう。

悪人の救いと道

一人の青年がある。彼は親に対する鋭い反逆心を持つていた。彼は事々に親に反抗して、親の慈訓も耳に入らず、学業を廃し、悪友と交わり、日に／＼墮落の暗に落ちて行つた。その時、彼は決して悪人ではなかつた。

しかるに彼ははからずも一人の友に誘われて、仏教講演を聞きに出た。不思議に話は彼を打つた。その時から彼は深入りしはじめた。仏の教えは彼の魂を覚ました。彼はついに、本願の救い、悪人正機の救いの前に無条件にひれ伏して念仏の人となつた。その時、彼は罪悪生死の凡夫であつた。彼の心中には、ただ懺悔と感謝があるばかりであつた。

一切の反逆心が懺悔の中に滅んだ時、彼は親に対する大不孝に覚めた。はじめて親の前に一切の不孝をわびた。久遠のみ親の前に「罪悪深重煩惱熾盛」の凡夫となつた。2 彼はこの世の親の前にも、また不孝者となつた。彼の家庭は明るいものに変つた。

こうした例は、念仏の家におこる普通の事実であるが、悪人正機の救いが、「克ク孝ニ」の道の源泉となつた場合である。

まことに正しい宗教は、道徳の教えだけでは成就することが不可能であるほど硬化してしまつた魂を開いて、よく柔軟ならしめ、道を成就するのである。

間違ひ

しかるにもし、『歎異抄』の誤解されたある地方の如く、

「私は、どうしても親に対して反逆心がおきてやみません。」

「それが業だ。親に孝行せよと言うのは道徳じゃ。孝行は出来まいがの。その出来ぬのが業じゃ。業次第では親でも殺すのだ。」

「それなら、この親を悪まにやおれぬのが業でありますか。」

「その通りだ。『如何』もならんのだ。その『如何』もならんまんなまを、どこどこまでも、どこまでも御理解御同情下さるのがお慈悲である。」

これは、ただ、一つの例であるが、こうした傾向が一切の上に現われて、これを聞き、これを行ずるが故に、知らず知らずの間に、悪業自然のままを、願力自然と間違え、これを聞いたが故に、かえつて人間を墮落せしめるに至るのである。一切の悪を業に負わせ、内に転ずべき眼を外にそらし、悪機の深信なくして、悪人正機の救いをもてあそぶが故に、口にもすべからざる破倫を行い、その言いわけに『歎異抄』の聖

語が弄ろうされるに至るのである。あわれ超世無上の大願も、人間の醜みにくい相の言いわけとなつて、単なる道德の世界よりもなお劣つたものとなりおわるのである。もちろん以上の如きまちがいは少い。しかし幾分その臭味を持つが故に、他力をもつて無力となしたのである。

一切の宗教は、道德を無視し、道德に叛そむくことによつて成立つのではない。一切の世界に永遠の生命をふき込んで生かすもの、即ち宗教である。

愚悪自覚の意義

『大無量寿経』が唯一絶対の教であるとは、これを信ずれば他はどうでもいいということではない。又これを信ずればいかなる悪をも許されるということではない。人間最後の解決はここにあるということであり、一切の問題を解決し、一切の道を生かす根本の力となり、光となる、ということである。

もし教育者にして大信心あれば、彼は彼の内心に巣くう、名利、愛欲、懈怠等の煩惱を深信し、凝視するが故に、インチキなる施設経営によつて世を欺くことが出来ず、報恩感謝の軽き足を壇上に運んで、常行大悲の教育行に生きるであらう。

親子、兄弟、夫婦等、人間五常五倫の八万四千の世界は、唯一なる大信心によつて真に輝くに至るのである。

如来の智慧光は、衆生心内の虚偽を照破し、打ち砕き、迷信、邪見、自力、我慢等々の一切を打破して一物も残さず、ついに内へ内へと一切を全否定して、悪人たるの自覚に至らしめて、如来金剛の本願力に乗托し、大信心に住し、摂取不捨のみ光に生かさしめるのである。悪人自覚の人生に於ける意義は實にここにあるのである。

愚悪の自覚の人の集る所は明るく輝き、賢善人の集る所は、常に曇つて争いは絶えない。

唯信心の意義

宗教がもし、人生のあらゆる道を生かす根源ならば、何故に、

「しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらざ、念仏にまぎるべき善なきが故に、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故にと云々。」
と言われるのであるか。

弥陀の本願念仏は、唯一絶対の至上善なるが故である。この絶対善によつて、八万四千の雑善を「他の善も要に非ず」と否定し、八万四千の善を雑毒の善とおとして、みかえす所に、一一の善は大善の内容となり、真に生かされるのである。されば念仏の行者は、君の大神に忠を知れども不忠に泣き、孝を行ずれども孝にとまらず、仁義に生きてなお自己の不仁義を知り、法徳自然の「無我」なる生活態度は、あらゆる方向に光り輝き、行くとして可ならざるはなきにかかわらず、地獄一定の愚悪を知つて善を知らず、ただ如来廻向の大信心に生かされて、合掌して久遠の眞實に一貫相統の歩みを成就するのである。

善悪を共に否定して、本願の名号を執持せしめんとするは、善悪の底にかくれたる自力我慢我執を否定せんが為である。務めて報いられずば直ちに怒つて真暗くなり、

愚痴に陥つて悶々の情に泣くは、内に大信心なく、我が小善に囚われるが為である。压制にして人を泣かしむるは、彼の内なる自力我慢の為である。されば一切の善悪を超えて本願の信心に生かされる時、そこに「金剛之志」を発するのである。

聖人は信巻に、
「故に、真実の一心是れを『金剛の真心』と名く。金剛の真心、是れを『真実の信心』と名く。」

と仰せられた。八万四千の雑善に、「金剛の真心」はない。常住なる如来心によつてのみ、金剛の真心がある。金剛の真心によつてのみ、一貫真実の生活はあり、よく一切の善をして善たらしむるのである。一切の善悪を超えなければ、久遠の太陽たる如来の絶対善には生きられない。淳厚相統の一心なくしては、一切の善は善として成立しない。

一県の県視学、ことごとく司直の手に裁かれ、一市の学校長の大半、冷き鉄窓に悔い、相對善を神と結んで現世利益を説く類似宗教の末路等を思い合はす時、思い半に過ぎるものがある。

小善をたのむ機には、その心底に未だ清算されざる多くの虚偽をひそめる。念仏の大行、千万億の重さを持てる杵きねとなつて、一切の虚偽を内に壊くだく時、人は内に己に還つてよく大信の行者となり、善悪順逆の二境を超えて、永遠の一道に生きるのである。

されば聖人にあつては、よく無我の大信に生きれば、それが国家に忠なるゆえんであり、即孝道であり、即師弟道であり、即慈悲であつた。無量寿経の教えこそ、一切をして一切の道に生かす真実宗教であつた。